

第43回地盤工学研究発表会

ディスカッションセッション

【DS—1 地震・洪水による地盤災害を防ぐために—地盤工学会からの提言—】

地盤工学会60周年記念事業の一環である表記特別委員会が、活動の中間報告と支部・会員からの意見を伺うために開催した。災害被害の調査報告ではなく地味なテーマと思われたが、300人以上の方が参加し本委員会の意義は高いことが認識できた。次のような貴重な意見をいただいた。地震や洪水・豪雨の被害調査で終わるのではなく、それで得た教訓を生かし、復旧・復興、耐災診断・補強、耐災設計、防災等での地盤工学を生かした社会への提案・提言、知識情報の周知、市民教育等ができる恒常的体制が地盤工学会本部に必要である。このような学会活動は、国・地方公共団体の自然災害対策の促進の後押しになり、大いに進めて欲しい。

(文責：東京理科大学 龍岡文夫)

【DS—2 JGS 原位置データベースとその利用】

岩盤物性は原位置試験を基に決める。しかし、試験はダム、原子力発電所など大型プロジェクトに限られトンネル、斜面などでは経済面ではば実施不可能である。「JGS 岩盤の工学的分類と原位置岩盤物性に関する委員会」は国・地方自治体・電力会社のご協力を得て約200のプロジェクトから岩盤変形試験、プレッシャーメータ試験、せん断試験（各1000点強）のデータを収集し、データベースシステム〔2008年度版〕を構築した。この試みは我が国で初めてのもので岩盤区分は“JGS 工学的分類方法”に基づく。今後の極めて重要な資料となると思われる。上記委員会成果の報告、不連続性を考慮したFEM解析に基づく原位置試験利用上の問題の発表があった。参加者から不連続面性状・地点情報・ボーリングコア写真など詳しい情報が必要との意見があった。

(文責：埼玉大学名誉教授 吉中龍之進)

【DS—3 杭の水平載荷試験基準案】

杭の水平載荷試験基準改定WGの委員より、同WGで検討を重ねてきた改定の本文案および解説の骨子について紹介し、会員の意見を求めた。質問として、段階載荷と連続載荷の使い分け、長期載荷の載荷時間、動的試験の扱いなどが挙げられた。また、試験目的に即した結果の解釈や利用法について解説に詳述して欲しい、などの意見が出された。今後、これらの意見を参考に、改定の本文案を再度吟味するとともに解説の執筆を行っていく予定である。

(文責：千葉大学 中井正一)

【DS—4 男女共同参画ディスカッションセッション】

4回目となる今年度は、女性の参加を増やすために学

会としてどのような活動をすべきかを考え、官庁、企業などの採用担当者の考えを聞いて討議を行うことを目的とした。日本原子力学会理事の小川順子さんから「超マイノリティ女性たちのパワーアップは組織を超えた連携から」と題して、日本原子力学会における取組みについてご講演いただいた。特に、学会内に常設委員会を発足しコンスタントに情報を発信することが重要であるとの指摘がなされ、本学会としても今後検討していく必要があると思われる。採用担当者からの現状報告と質疑では、男性も含めたワークライフバランスの改善という視点が必要との発表があった。

(文責：広島大学 土田 孝)

【DS—5 どうなる！透水試験法の国際化—わが国に影響を及ぼす地盤関連ISOの審議状況と地盤工学会のISOへの貢献—】(報告：5編)

平成19年度のISO活動状況(地盤工学、地盤環境、ジオシンセティックス)に関する報告がなされた後、現在、ISO/TC182/SC1の中でウィーン協定のCENリード案件としてCEN/TC341/WG1(地盤調査と試験法)で審議中の現場透水試験規格案を中心に話題提供が行われた。現場透水試験のISO規格案は6件あり、いくつかの点で我が国の仕様とは異なる部分があること、特にルジオン試験ではいわゆるルジオン値を試験結果として評価せず、新たな透水性の指標が導入されていること、試験方法も昇圧・降圧段階数の明言がないなど、我が国の手順と異なる部分があることが報告され、参加者から活発な質疑応答が行われた。学会員のISO活動に対する関心の高さが伺え、今後もDSをISO活動の議論の場として活用する必要性が感じられた。

(文責：室蘭工業大学 木幡行宏)

【DS—6 「首都圏を直下地震から守るために—地盤工学からの提言—以降の研究委員会活動、および、被災経験と新しい視点から見た地盤工学の今後の展望】(紹介：1名、話題提供：5名、ディスカッション：7名)

「首都圏を直下地震から守るために」の提言以降、関東支部では防災面を中心に4年間に八つの研究委員会が実施されてきた。本セッションでは、①これらの活動内容の「紹介」、②5名のキーパーソン(他支部2、関東支部3)による「話題提供」、③「ディスカッション」が行われた。リスクマネジメントやBCPなど新しい視点に立った研究(ソフト)の重要性と共に、コアとしての地盤工学研究(ハード)の大切さが確認された。さらに、学会研究活動の本部支部の連携や役割分担にも熱心な意見交換がなされた。約100名の参加者を得て、有意義な催しであった。